



子供と自然

牛 島 義 友

幼児は自然の子であり、自然こそ幼児にとつて最も望ましい環境であり、夏のように海に山に大自然に接する機会が多い季節こそ子供に適した時期であるかのようにいわれる。しかし人間の幼児は果して自然の子であるか。考えようによると人間の幼児たちは最も非自然的な生活をしているともいえよう。即ち人の子は生まれてくるといきなり大自然の中にほうり出されるのではなくて、母親の懐に家庭の中で完全に保護された生活をしている。暑さ、寒さその他の自然の変化から完全に保護され、又様々な危険な刺戟から隔離されて生活しているのがむしろ人間の子供の生活の姿である。

もし人間の子供が生まれるとすぐに自然の中にほうりこまれたらどんなことになるであろうか。先年印度の山奥からつれてこられた狼子即ち狼の乳を吸つて育つたというカマラという少年のことが話題になつた。この子供はもう八才程の年齢になつていたのであるけれど、立つて歩くことが出来ず四つ這いになつていつも歩いてた。そのために手は非常に長く、肩は張つて、その四つ足で歩く速さは到底走つて追いかけても追いつかないほどの速さをもつていたといわれる。この子供は人間の言葉を理解することも、言うこともはじめは出来なかつたし、夜などは狼のように遠吠えをして人々を驚かした。このカマラがどうやら人間らしい行動を示すようになるのには非常に長い間の世話が必要であつた。数年間、親切な宣教師の夫人に育てられたけれども、そのなくなつた時の精神年齢はせいぜい三才位

にしか達していなかつた。これが人間がいきなり大自然の中にほうりこまれた時の姿かもしれない。もつともこのカマラが果して正常の知能の子供であつたかどうかは問題となる。カマラの事を詳しく記述しているゲゼル博士は、「彼は白痴ではなかつた」と言つてはいるが、この子供の行動や或いはその人間としての養護がなされてからの發育が非常に遅々である点から見ても、精神薄弱弱児ではなかつたかとの疑いも多分に存する。しかしとに角人間の子供は、このような自然のままの生活をしていないところに、むしろ他の動物と違つた特色があるといえないだろうか。子供の理解する自然はその経験を通して理解する自然である。家庭の窓から眺める自然であり、金網を張られた中での自然の生活である。従つて子供の自然体験の特徴としてはまず安全性が考えられる。子供にとつては、自然は家庭の中と同じような完全な場所と考えられている。或いは家庭のように親しめる場所として、いわばエデンの園のような樂園的なものとして感じられている。子供が、この安全な楽しい自然の中で生活するということは非常に美しいことではある。野や山に咲く草花、虫、鳥などと共にのたしく遊ぶ姿は本当に自然と一つになつた美しい風景でもある。しかし現実の自然は必ずしもそのように美しい安全な場所ばかりではない。そのため、思わず自然の危険に触れ事故を起すというようなことも少くない。例えば子供達は猛獣を見ても必ずしも怖がらない。動物園のライオンの檻の傍に行き、つい手をさしのべて愛撫したくなるような親しみさえ感ずる。或いは街頭を疾駆する自動車、電車などにも何らの危険も感ぜずにいきなり近づいたり、或いはそれに触れようとすることも屢々ある。このような事から起る交通事故も少くない。故に幼児の自然生活の場合に於いては、幼児は自然というものを完全に信頼しており、安心して生活しているだけに、指導者はこの思わざる危険事故から防止する事を絶えず考へてやらねばならない。この意味でやはり金網を張りめぐらすことが必要にもなつてくる。動物たちの自然は生存の競争の場である。動物は自然物を食べられるものと、食べられないものとに分けてみる、と或る学者はのべている。食べられるか、食べられないかによつて彼等是一个の世界像を描いている。

彼等が自然の中で動きまわつてゐるのは単なる遊びごとでなく、絶えず何か食べられるものを探しながら、苦しい

生活の戦いを営んでいるのである。とんびがのんきそうに空を飛んでいるのは決してたのしい遊びではなく、絶えず何か食べられるものはそこらにないかとさがしまわつているのである。数日間も餌にありつかないで空腹のまゝでさがしていることもあるかもしれない。またこのように餌を探している動物そのものが他の動物から目をつけられ餌として追い廻されているのである。たゞ餌を探すという呑気なものだけでなく、絶えずより強い外敵から身を守りつゝなお食物をさがす非常に息づまるような生存競争の場である。

子供たちは役に立つとか役に立たないとかに関係なしに遊びのために草を取り花を集めてくる。このように生活から超越して自然の中に遊ぶことが出来るのは人間の特権かもしれない。このことによつて人間は直接生きることから開放されて、自然を楽しみ、或いは自然に手を加え、更に自然に対する不遜な征服的な態度になるおそれもある。又子供たちは全く無駄に自然をあらすことも起しやすい。無暗に草花をちぎつてみたり、とんぼや鳥をやたらに殺生する傾向にもなりやすい。この自然を単なる無駄な遊びの場としないで、何か直接の生活から超越して人間の文化を作り出す場に尊くということが大切な指導ともなる。この自然に対して正しく人間の力を加え、この不毛の土地からいろいろと有益な物を作り出すように働きかけること、この土地を耕すこと、それが文化の始りである。草花の種を植えたり大根を作る栽培を教えることは大切な自然教育である。次に幼児は自然を擬人化する傾向が強くなつてくる。猿や犬などの動物はもとよりのこと、自然界のあらゆるものを人間的な目で眺める傾向がある。酷暑と嚴寒の交替する荒涼たる死の世界である月に對しても子供たちはたのしい兎さんが餅をついている世界として眺める。この自然に對する擬人化的な見方は美しい詩の世界であり、子供にとつては大切な夢の世界である。しかし、この詩の世界美しい夢の世界は、同時に科学的な考え方の妨げとなる点も忘れてはならない。子供からすべての夢を取り去り、擬人化的な考えを捨てさすのは必ずしも正しくない。むしろ幼児期においてはその夢を通しての情操教育をなす事が大切である。けれども同時にまた自然を正しく観察し、正しく理解する道を教えることも忘れてはならない。然しこの科学的指導にも色々問題がある。自然を科学的に処理し加工し、自然を改造しようとする態度は、必ずしも望ましい科

学的な態度ではない。自然は人類に対して豊かな恩恵を与え、科学的な資源に富んではいるが、しかし、同時に又、自然は人類に対して厳しい怒りを放ち審判を与えるものである。特にアジアにおいてはこの自然の怒りは激しい。モンターンの風土においては自然の破壊力は人間の科学の力でも到底防ぎとめることの出来ないほどのはげしさをもっている。従つて、アジアの人たちは、この自然の前に跪くことを教えられている。自然に即した生活は東洋人の精神の基調となつている。これに対して科学主義的な西欧人に於いては、たゞ自然を征服し、人間の立場から自然を利用する態度のみを主張しようとする傾向がある。世の中を改造しようとする態度はとかく人間を不遜な態度に導いていく。自然の征服という驕慢な態度になつてゆく。かかる態度には勿論優れた点もあり、この態度によつて科学的な進歩も促進されてはいる。人間の力によつて原子の構造を改革し、原子爆弾すら作り出すことが出来た。しかし現在はこの人間の作り出した原子爆弾のゆえにゆきづまり、人類の文化の破壊に瀕しようとしてゐるともいえる。この唯物的な自然に対するゆきづまりを解決するためには、人々は自然に対して感謝の態度で望む必要がある。たゞ自然を利用するのでなく、利用さしていたゞける恵みにむしる感謝し、敬虔な態度で自然にのぞむ必要がある。たゞ自然を利用する子供たちはとかく自然を遊びの物と見る傾向があるが、同時に又この自然の前に跪き、自然に感謝する気持を与えることが大切である。すぐれた科学者たちは、その研究において、自然の神秘、自然の偉大さに跪くことも出来る。科学的な態度とこの宗教的な道徳的な態度とは決して矛盾するものではない。しかし、単純な科学的な態度、浅はかな知識においてはとかく自然を軽視し、征服しようとする態度になりやすいものである。子供に対してはこのつゝましい態度で眺め、自然の恩恵に感謝し、自然を感謝する道を教えることが必要である。まだきわめられていない部分が多分に多い事に驚き、人間の知識の限界を、知れば知るほど自然の優れた調和、比類のない美しさにたゞ頭が下るであろう。故に幼児に対しては花をむしり、草を折るのではなく、このような自然の神秘に少しでも近づけるように手引をしてやる必要があることであろう。自然は単に観察の対象だけではなく、又人間の道徳的な情操を培う大切な温床である。